

- ◎家畜伝染病の防疫対策にしっかりと取り組もう。
- ◎公共牧場の有効活用と自給飼料の安定確保を進めよう。

---

## 乳用牛

---

### ◇ 子牛及び育成牛の飼育管理

#### 1 出生時

- (1) 子牛は、生まれたらすぐに清潔な乾いた稲わらなどで体を拭き、へその緒を消毒する。母牛に1時間程度なめさせると、マッサージによって子牛の免疫力や血液循環機能を高める効果がある。
- (2) 初乳は、生後4時間以内に2リットル以上、さらに12時間以内に2リットルを飲ませる。母牛が血乳や乳房炎等の場合は、凍結初乳や専用の粉末初乳を使用する。子牛が初乳を飲めない場合は、ストマックチューブを用いて強制的に哺乳する必要があるが、その際は、子牛が動いて食道や喉を傷つけないように、両足で挟みこむなどしてしっかり保定する。
- (3) 初乳給与後は、稲わらを敷き詰めた子牛ペン又はカーフハッチに個別に収容し、冷気が直接当たらないようにする。出生直後は、気温が15℃以下になると寒冷ストレスを受けることから、必要に応じて暖房器具や保温ジャケットを利用する。
- (4) 生後3日程度経過し、順調に哺乳できるようになれば、スターター（人工乳）を給与し、ルーメン絨毛の発達を促す。このとき、スターターを飼料と認識させるために、3日間程度は人為的に口に入れて味を覚えさせる。

#### 2 哺乳時

- (1) 哺乳は朝夕2回に分けて行う。1日4リットルが一般的であるが、生後3週目以降は要求量が高まるため、徐々に増やしてもよい。
- (2) スターターの採食量が1日当たり1kg以上となったら離乳させる。生後5週目の段階でスターターの食い込みが悪い場合は、ミルクを減らして採食を促すとともに、水分補給のため、ぬるま湯を給与する。ただし、ミルクとぬるま湯の同時摂取は消化吸収の妨げとなるため、30分以上の間隔を空ける。
- (3) 哺乳期間は、下痢の発生を防ぐため、乾燥した敷料を十分に補充して腹が冷えないようにする。下痢の場合は、ミルクの給与量を減らすとともに、脱水症状を防ぐために、電解質を溶かしたぬるま湯を給与する。

#### 3 育成時

- (1) 離乳後は、月齢の近い子牛同士で群飼する。疾病の予防と良好な発育を促すため、清潔で換気の良い畜舎で飼育し、良質乾草を自由採食させる。
- (2) 濃厚飼料は、たんぱく質含量の高い育成用配合飼料を給与する。下痢を防ぐため、

給与量は徐々に増やす。1回当たりの給与量は最大1kg程度とし、朝夕2回に分けて1日当たり2kgを目安に給与する。

(3) 24か月齢以内の初産分娩を目標として、遅くとも14か月齢までには初回授精ができるように育成し、体重350kg、体高125cm以上に成長したものには積極的に授精する。

#### 4 放牧時

(1) 放牧開始前には外気や青草に慣らすため、パドック等を利用して放牧馴致を行う。また、夏期の放牧では、直射日光を避けるスペースと飲水場所の確保に注意する。

(2) 公共施設に育成牛を預託する場合は、伝染性呼吸器病の予防のため、預託開始の3週間前までにワクチン接種を済ませておく。

---

### 肉用牛

---

#### ◇放牧に向けた飼育管理

##### 1 放牧馴致

放牧1か月前から徐々に運動場に出して日光浴をさせるとともに外気に馴らしたり、少量でも毎日青草を給与し、第1胃内の状態を放牧時の環境に近づける。

##### 2 病気の予防

舎飼期に疾病に罹患している場合は、早期に治療し回復してから放牧する。ワクチンは、繁殖雌牛には異常産予防の「アカバネ病ワクチン」や気腫疽等予防の「牛嫌気性菌3種ワクチン」、子牛には肺炎予防のための「牛5種混合ワクチン」を適期に接種する。

##### 3 削蹄

舎飼期は運動量が少ないこともあり、比較的早く蹄が伸びることから、削蹄してから放牧する。

---

### 豚

---

#### ◇ 衛生対策

1 豚流行性下痢については、冬季に入ってから再発がみられており、引き続き消毒等による発生予防やまん延防止対策を徹底する。

2 飼養環境の悪化は疾病発生の原因となるので、舎内の換気や室温の急変には十分注意する。また、過密飼育はストレスを誘発するので発育に応じた適正密度を保つようにする。

3 豚舎への病原菌やウイルスの侵入を防ぐため、踏込消毒槽を設置し、履物や車両の消毒を適切に行う。消毒剤の効果は有機物の混入や直射日光により低下するので、2～3日ごとに消毒液を交換する。

4 豚舎及び豚房のふん尿や有機物の汚れは、水洗あるいはスチームクリーナーにより十分に洗い落としした後、消毒と石灰散布を徹底する。

5 ふんの状態や目ヤニの有無などを毎日観察して、健康状態の把握と異常豚の早期発見に努めるとともに、異常を認めた場合は速やかに獣医師の診断や治療を受ける。

## 鶏

### ◇ 青森シャモロックの飼育計画

- 1 青森シャモロックの飼育に必要な鶏舎面積は、飼育密度が1㎡当たり5羽以下、鶏舎の使用期間が飼育に120日、消毒に30日の計150日を基準として算定する。
- 2 ビニールハウス利用の鶏舎では、丈夫な42.7mmパイプとする。
- 3 鶏舎の床面は、ネズミなどの野生動物侵入防止や衛生対策のため、厚さ10cmのコンクリート製とする。
- 4 雄は100日齢、雌は120日齢を目途に出荷する。消毒期間を考慮しても年2回以上の出荷が可能である。
- 5 出荷時期は、販売先との契約等により決定するが、収容鶏舎や入雛時期の調整により自分の経営に適したローテーションは下の式を参考に組み立てる。

#### 《参考》

- ① 入雛羽数＝年間出荷計画羽数÷育成率(98%)÷商品化率(95%)
- ② 必要鶏舎面積(㎡)＝入雛羽数÷5羽÷2回
- ③ 棟数＝必要鶏舎面積(㎡)÷一棟あたり鶏舎面積(㎡)

## 草地・飼料作物

### ◇ 草地の適切な施肥管理

- 1 採草地
  - (1) 早春追肥は、消雪後速やかに行う。
  - (2) 牧草の季節生産性に合わせた施肥を行う。年間の施肥量及び施肥配分は表1及び表2のとおりとする。土壌中の交換性加里含量が18mg/100gを超える場合は、加里を減らす。
  - (3) 牛尿を追肥として施用する場合は、肥料成分簡易推定式等(表3)により、牛尿中の肥料成分量を把握し、施肥量に応じて化学肥料を減らす。

表1 オーチャードグラス主体草地の目標収量別施肥基準

年間目標収量 (生草 t/10 a)	年間成分施肥量 (kg/10 a)				刈取 回数	施肥配分 (早春：各刈取後)
	窒素	りん酸	加里	苦土		
5	15	10	10	10	3	5：3：2
6	20	15	15	10	3	5：3：2
					4	4：3：2：1
7	25	17	17	10	4	4：3：2：1

表2 チモシー主体草地の目標収量別施肥基準

年間目標収量 (生草 t /10 a)	年間成分施肥量 (kg/10 a)				刈取 回数	施肥配分 (早春：各刈取後)
	窒素	りん酸	加里	苦土		
4～5	10	6.7	6.7	10	2	4：1 または 3：2
					3	5：3：2
6	16	10.7	10.7	10	3	5：3：2

表3 窒素及びカリの推定式

$$\text{窒素 (\%)} = 0.0002\text{EC} \times \text{EC} + 0.0014\text{EC} + 0.0272$$

$$\text{加里 (\%)} = 0.011\text{EC} + 0.0429$$

注) EC：電気伝導度値 (ms/cm)

## 2 放牧草地

収量の季節平準化をねらいとした施肥を行う。施肥量は表4のとおりとする。

表4 放牧草地の目標収量別施肥基準 (標高 400m以下、スプリングフラッシュ抑制草地)

年間目標収量 (生草 t /10 a)	年間成分施肥量 (kg/10 a)				施肥時期及び施肥配分
	窒素	りん酸	加里	苦土	
4	10	10	2.5	10	年2回施肥：6月上～中旬に6割、8月上～中旬に4割とする
5	15	10	4	10	年3回施肥：早春に2割、6月中～下旬に5割、8月上～中旬に3割とする

### ◇ 牧草地におけるムギダニの早期発見と防除

- 1 ムギダニは、4月中旬頃から活動期を迎える。ムギダニの被害にあった牧草は葉が次第に黄変し、多発した場合は枯死するので早期発見と防除に努める。
- 2 ムギダニの発生が著しい場合は、スミチオン乳剤の1,000倍液を散布し防除する。なお、散布後2週間は採草、放牧を避ける。

### ◇ とうもろこし畑の準備

#### 1 適品種の選定と種子の確保

本県の奨励品種は表5のとおりである。この中から早晩性や作付体系を考慮しながら栽培期間内で黄熟期に達するものを選択する。

表5 サイレージ用とうもろこしの奨励品種

早晩性	品種名
極早生	おおぞら
早生	パイオニア 100 日 (P9400)、パイオニア 106 日 (36B08)、ロイヤルデント TH472 (TH472)、スノーデント 110 (LG3520)、スノーデント 108 (LG3490)、パイオニア 108 日 (34N84)、ロイヤルデント TH680、北交 65 号、ゴールドデント KD550
中晩生	パイオニア 115 日 (34B39 及び P1690)、クミアイデント 118N、サイレージコーン NS127、パイオニア 126 日 (32F27)

注) ロイヤルデント TH472 及びロイヤルデント TH680 はすす紋病の前歴がないほ場に限定して作付けする。

## 2 ほ場の準備

- (1) 完熟した堆肥を 4～8 t/10 a 施用し、プラウ等により土壌と混和する。
- (2) 砕土及び整地の良否は、播種精度、出芽揃い、除草剤の効果等に影響するので、ていねいに行う。

## 3 土壌改良資材の施用

- (1) 石灰質資材は、土壌診断に基づき pH6.0～6.5 の酸性矯正量を施用する。
- (2) リン酸質資材は、堆肥からのりん酸供給量が 10kg/10 a 以上あれば施用しなくてもよい。